

産経新聞 2020年11月30日 「ひこばえ倶楽部」への投稿掲載

(令和2年度入学) 高校1年(六か年コース) I組 箱崎大斗 君

老若男女、さまざまな人々が利用している電車。僕が初めて電車に乗ったのは小学校低学年のときだった。

電車を動かしている運転士がとても輝いているように見えた。当時は「電車の運転士になりたい」と夢に願うくらい、あこがれの存在だった。

大きな電車を運転するには、それ相当の技術が必要になる。しかも電車には、さまざまな路線、車種があり、すべて同じようにできるものではない。それぞれの運転の仕方や操作方法がある。

何より、大勢の人々を一度に運んでいるのである。「多くの命を運ぶ」という責任とプレッシャーも背負っている。

いつも無意識に乗っている電車は、誰かが大変な努力をして動かし、僕たちを運んでくれている。

もっと運転士さんに感謝をして、乗らなければいけないと思っている。